

Title	第三者が援助者に自己呈示動機を推測するメカニズム： 関係が予期される観察者の存在と援助に伴うリスクが及 ぼす影響
Author	山本, 佳祐 / 池上, 知子
Citation	人文研究. 70 卷, p.91-112.
Issue Date	2019-03
ISSN	0491-3329
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学大学院文学研究科
Description	井上徹教授：大黒俊二教授退任記念

Placed on: Osaka City University Repository

第三者が援助者に自己呈示動機を推測するメカニズム —関係が予期される観察者の存在と援助に伴うリスクが及ぼす影響¹⁾—

山本 佳祐・池上 知子

本研究は、自己呈示理論とコスト信号理論の観点から、第三者が援助者に自己呈示動機を推測する背景について検討した。大学生205名が、援助場面のシナリオを読んだ後、援助者の印象および動機について評定した。その結果、観察者がいない状況に比べて、観察者がいる状況の方が、援助者に自己呈示動機が推測されやすかった。この結果から、第三者は素朴に保持している自己呈示理論に基づいて、援助者の動機を推測していることが示唆された。ただし、予想に反して、観察者が援助者と今後関わりを持つかどうかにより、自己呈示動機の推測の程度に差はなかった。また、第三者が援助者に自己呈示動機を推測しても、援助者の印象には影響していなかった。一方、援助行動に伴うリスクが低い場合よりも、高い場合の方が、援助者に自己呈示動機が推測されにくくなるにもかかわらず、援助者に対する評価が低下しやすくなった。第三者が素朴に保持しているコスト信号理論に基づいて援助者の動機を推測するという仮説は支持されず、高いリスクを伴う援助行動は、倫理的な観点から不適切な行動として評価が低下する可能性が示唆された。最後に本研究の意義と今後の課題について考察した。

問題

援助行動は本来、社会的に望ましい行動である。それにもかかわらず、援助者は、援助に直接関与していない立場にいる第三者からしばしば批判される。例えば、芸能人（援助者）が被災地に寄付をした際に、視聴者（第三者）から「偽善者」と批判されることがある。人は、ネガティブな行動からはもっぱらネガティブな動機を推測するが、ポジティブな行動からはポジティブな動機を推測することに加えて、ネガティブな動機も推測する傾向を持つ（伊藤・池上, 2006; Ito & Takai, 2006）。つまり、社会的に望ましい行動を取った援助者が、その行動から直ちに肯定的な評価を受けるとは限らない。

人は他者からの評価によって、将来の行動が左右される。したがって、第三者が援助者を批判することにより、援助者のその後の援助行動が抑制される恐れがある。なぜなら、援助が必要とされる場面に遭遇した際、評価懸念（他者からの否定的評価に対する恐れ）により、援助が抑制される可能性が指摘されているからである（Latané & Darley, 1968; 高木, 1987）。近年、災害被害が頻発する中で、人々の間で互いに協力し合うことがより重要になってきていることに鑑みると、第三者の批判を恐れて人々が援助を行わなくなることは問題であろう。援助者が批判されないための方策を考える必要があるが、そのためにはまず、第三者がなぜ援助者に否定的な印象を抱くのかを解明する必要がある。そこで本研究では、第三者が援助者に否定的な

印象を抱く心理的な背景について検討することにした。

先行研究では、第三者は援助者の動機に基づいて評価を行うことが示唆されている (e.g., Carlson & Zaki, 2018; 針原, 2015)。これらの研究ではいずれも、援助者の動機情報について実験的に操作しており、援助者は他者を助けるために援助を行ったと伝える利他的動機条件、援助者は何らかの利益を得ることを目的として援助を行ったと伝える利己的動機条件、そして動機情報を与えない統制条件を設け、それらの中で比較を行っている。その結果、利己的動機条件は、統制条件および利他的動機条件に比べ、援助者に対して利己的な印象ないし否定的な印象を抱きやすいことが示された。Alicke, Gordon, & Rose (2013) は、態度と行動の非一貫性が、偽善判断を高めることを示唆している。態度を動機に置き換えれば、利己的動機に基づいて、利他的行動を行っているという非一貫性が、第三者が援助者を批判する大きな原因であると考えられる。

しかし、第三者がどのようにして援助者に利己的動機を推測するのかについては、これまでの研究で十分に解明されていない。先述の通り、針原 (2015) や Carlson & Zaki (2018) では、援助者の動機情報が実験者によって参加者に与えられていたため、動機推測が何に基づいてなされるのかについては明らかでない。しかし、日常生活においては、援助者の動機が明示されていないことも多く、それにもかかわらず、上記のような第三者による批判がしばしば生起する。したがって、人々がどのような根拠に基づき、何を手がかりとして援助者の動機を推論しているのかを明らかにする必要がある。

山本・田中 (2018) は、第三者が観察者²⁾の存在を手がかりとして、援助者に自己呈示動機³⁾を推測する可能性を探索的に検討している。観察者が存在すると、人は自己呈示動機 (人からよく見られたいという動機) が喚起されやすいことは、広く知られている (Cottrell, Wack, Sekerak, & Rittle, 1968)。第三者はこのことを素朴に理解していると考えられる。第三者がこの素朴理論に基づいて動機推測を行っているならば、援助場面に観察者がいると、援助者に自己呈示動機を推測しやすくなると予測できる。このような議論に基づけば、観察者の存在が動機推測に影響を及ぼすという予測は妥当であると考えられる。

しかし、結果は、観察者の有無により、動機推測の程度に差はみられなかった。ただし、この研究では、以下に述べるように、シナリオ設定上の問題が3点指摘されている。第1に、実験で用いたシナリオでは、参加者が援助場面に居合わせている設定となっていた点である。そのため、観察者がいない条件のシナリオにおいても、参加者が観察者の立場にいる想定となっていたために、厳密には観察者がいない条件として設定できていなかった可能性がある。第2に、観察者が援助者の行いを目撃しているという情報がシナリオに明記されていなかった点である。そのため、参加者は、観察者を単なる背景としてしか認識していなかった可能性がある。第3に、シナリオでは、観察者は援助場面に偶然居合わせた設定となっており、援助者と今後関わるということが予期されにくい状況であった点である。援助者が今後関わることはない観察者に

対して自己呈示を行っても、それにより何らかの利益を得るとは想定しにくい。そのため、参加者は観察者の存在に特別注意を向けず、援助行動の背後に観察者に対する自己呈示動機が働いていたかもしれないことを考慮しなかった可能性がある。

観察者がいることで自己呈示動機が喚起される程度は、観察者が行為者とどのような関係性にあるかによっても異なる (Leary & Kowalski, 1990)。そのため、第三者が援助者の動機を推測する場合においても、援助者と観察者の間に今後関係が予期されるか否かは重要な要因となろう。Leary & Kowalski (1990) によれば、自分が高い価値を置いている目標との関連性がある人物に対するほど、自己呈示動機がより高められるとされる。例えば、青年期・成人前期における重要な発達課題である「友人獲得」という目標 (Havighurst, 1972 児玉・飯塚訳 1997) を持っているときは、将来的に関わることがない他者よりも、関わることが予期される他者に対する方が自己呈示への動機づけが高まる。どのようなときに自己呈示動機が喚起されやすいかに関するこのような理論を、人々は自身の経験から素朴に理解していると考えられる。したがって、第三者はこうした自己呈示理論を素朴に保持し、その理論に基づいて動機推測を行っているという仮説が立てられる。この仮説が妥当であるならば、援助場面に観察者がいない状況よりも、観察者がいる状況の方が、第三者は援助者に自己呈示動機を推測しやすいと予測される (予測 1)。また、援助者との今後の関わりが予期されない観察者がいる状況よりも、関わりが予期される観察者がいる状況の方が、援助者に自己呈示動機を推測しやすいと予測される (予測 2)。

本研究では、上述の山本・田中 (2018) における実験手続き上の 3 つの問題点を踏まえ、シナリオ内容を改善し、観察者の存在が動機推測に及ぼす影響について再検討する。第 1 の問題点については、参加者が援助場面に居合わせていない形でシナリオを作成し、客観的な出来事として認識できるように改善する。第 2 の問題点については、観察者が存在しているという情報に加えて、援助行動を目撃していることをシナリオ内に明記し改善を図る。第 3 の問題点については、援助者との関係予期の有無を条件操作することで厳密な検討を行う。これが本研究の第 1 の目的である。

以上、動機推測に影響を及ぼす要因として、観察者の存在という状況要因に注目してきたが、援助行動の内容そのものが動機推測に影響を及ぼす可能性も考えられる。援助行動には、一般にコストが伴う。コスト信号理論によれば、自己犠牲を伴う行動は、思いやりという個人の資質を他者に伝達する (Zahavi & Zahavi, 1997 大貫訳 2001)。たとえば、チメドリの群の中には、仲間が給餌している間、捕食者を見張る個体が存在する。見張り役の個体は、捕食者が近づくと、鳴き声で仲間知らせる。それは同時に、見張り役自身が捕食者に居場所を知られるという危険を冒すことになる。このように、見張り役を担うことは生存において不利になるが、チメドリの群の中で上位の地位に位置する個体ほど、この見張り役を買って出る傾向にある。Zahavi & Zahavi (1997 大貫訳 2001) によれば、上位の個体は、他の個体からの信頼を獲得

するために自己を犠牲にし、自身が利他的な資質を備えていることを他の個体に見せつけていると説明している。自己犠牲を払うことで個人の利他性を伝達するというこの理論の示唆するところを素直に踏まえるならば、援助行動に高いコストを支払っている場合の方が、低いコストしか支払っていない場合よりも、第三者は援助者に自己呈示動機を推測しにくくなると予測される（予測 3-1）。

しかし、人は、特に男性において、同性の観察者がいる場面よりも、異性の観察者がいる場面で、援助行動をより行いやすくなることが指摘されている（Iredale, Van Vugt, & Dunbar, 2008; Van Vugt & Iredale, 2013）。これは、コストを支払ってでも援助行動を行うことが、異性へのアピールに有効であると素朴に理解しているからこそみられる現象であると考えられる。すなわち、人々がコスト信号理論を素朴に理解していることを意味する。第三者がコスト信号理論を素朴に保持し、それに基づいて動機推測を行うならば、援助者が高いコストを支払っている場合に、かえって自己呈示動機を推測しやすくなるという予測も可能である（予測 3-2）。実際、高いコストを支払う利他主義者が、他者から好意的に思われたい可能性を示す知見も報告されている（e.g., 河村・楠見, 2017; Parks & Stone, 2010）。ただし、なぜそのような評価がなされるのか、その心的メカニズムは明らかにされていない。同様に、援助コストが動機推測に及ぼす影響についても、現在までに実証的な検討はなされていない。

したがって、第三者はコスト信号理論が示唆する内容を素直に受け取るのか、あるいはその理論を素朴に保持していることでかえって自己呈示の可能性を疑うのかを実証的に明らかにする必要がある。本研究は、援助コストが動機推測に及ぼす影響について、上記 2 つの予測（3-1 と 3-2）のうちいずれが支持されるのかを探索的に検討する。これが、本研究の第 2 の目的である。

なお、本研究では、援助コストの中でもリスク（命の危険）に注目して検討する。援助行動に伴うコストは、努力、金銭、時間、危険などの側面から捉えられている（高木, 1982）。努力、金銭、時間のコストは、どの程度ならコストが大きいと認知されるのか、その基準が曖昧である。個人の経済水準や身体能力などにより、コストの捉え方に個人差が生ずると予想される。また、これらは一度失った後でも、ある程度取り返すことができるコストでもある。一方で、命に危険が伴うというコストは、万が一命を落とすようなことがあれば、取り返しがつかないために、一般にコストが大きいと捉えられると予想される。したがって、本研究では、命の危険を伴う援助行動が行われる場面と、そのような危険を伴わない援助行動が行われる場面の二場面を設定することにより、援助コストの大きさを操作し比較する。

本研究では、二つの理論的観点から、第三者が援助者に自己呈示動機を推測する際の手がかりを明らかにする。第 1 に、第三者が素朴に保持している自己呈示理論に基づき、動機推測を行うという観点から、観察者の存在が動機推測に及ぼす影響を明らかにする。第 2 に、第三者が素朴に保持しているコスト信号理論に基づいて動機推測を行うという観点から、援助コスト

が動機推測に及ぼす影響を明らかにする。

上記の予測に加えて、本研究では、援助者に対する評価が規定される心的過程についても検討する。援助者に対して自己呈示動機を推測することにより、印象が否定的になるという過程には、二つの経路が存在する可能性がある。Alicke et al. (2013) によれば、態度と行動の非一貫性が、偽善判断を高める。これに基づけば、自己の評判を高めることを目的とした利己的な動機（態度）で、他者を助けるという利他的な行動を取ることに、人々は嫌悪を抱くと想定される。すなわち、自己呈示動機の推測が、印象に対して直接的に影響を及ぼす経路が想定される（予測4）。一方で、Reeder, Vonk, Ronk, Ham, & Lawrence (2004) によると、第三者は状況手がかりをもとに、援助者に対して利己的動機を推測し、その結果、援助者の利他性についての評価を割り引くという過程が示唆されている。Reeder et al. (2004) は傾性帰属について議論していたが、動機推測においても同様の過程が存在すると想定される。すなわち、自己呈示動機の推測によって、利他的動機の推測が割り引かれ、評価が否定的になるという間接的に影響を及ぼす経路が想定される（予測5）。以上、援助者に対する評価が規定されるまでの過程を明らかにすることが、本研究の第3の目的である。ここまでの議論を踏まえて、Figure 1 に本研究の仮説モデルを示す。

本研究の予測

- 予測1. 観察者がいない状況よりも、観察者がいる状況の方が、第三者は援助者に対して自己呈示動機を推測しやすい
- 予測2. 援助者との今後の関係が予期されない観察者がいる状況よりも、関係が予期される観察者がいる状況の方が、第三者は援助者に対して自己呈示動機を推測しやすい
- 予測3-1. 援助行動に伴うリスクが低い場合よりも、高い場合の方が、第三者は援助者に対して自己呈示動機を推測しにくい

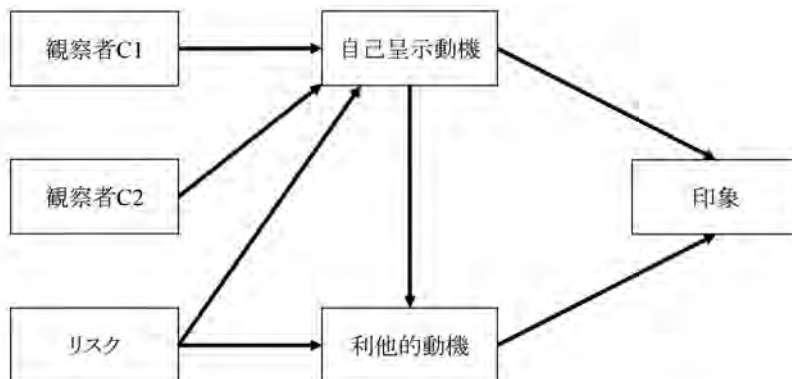


Figure 1. 仮説モデル

注) 観察者 C1 は、観察者がいる状況といない状況の比較を表す。観察者 C2 は、援助者と今後の関係が予期される観察者がいる状況と、関係が予期されない観察者がいる状況との比較を表す。

- 予測3-2. 援助行動に伴うリスクが低い場合よりも、高い場合の方が、第三者は援助者に対して自己呈示動機を推測しやすい
- 予測4. 第三者は、援助者に対して、自己呈示動機を推測するほど、否定的評価を行いやすくなる（直接効果）
- 予測5. 第三者は、援助者に対して、自己呈示動機を推測するほど、利他的動機の推測を割り引きやすく、その結果、否定的評価を行いやすくなる（間接効果）

方法

実験参加者と手続き

大学生205名（男性95名，女性96名，未回答14名，平均年齢18.9歳、SD = 1.50）を対象に質問紙実験を実施した。心理学関連の授業終了後に実験への参加を呼びかけ、当該授業の行われていた教室にて参加の意思を示した学生を対象に質問紙を配布した。実験参加者は、6種類ある援助場面のシナリオのうち1つを読み、各測定項目に回答した。実験は2017年6月上旬に実施した。

実験デザイン

本研究では、以下の二つの要因について、シナリオ内の記述を変えることにより条件操作を行った。第1の要因は、「観察者の存在」であり、観察者がいない状況、援助者との今後の関係が予期されない観察者（見知らぬ大学生）がいる状況、援助者との今後の関係が予期される観察者（同じサークルのメンバー）がいる状況の3条件を設けた。第2の要因は、「援助行動に伴うリスク」であり、高リスクと低リスクの2条件を設けた。いずれの要因も参加者間計画であり、計6条件が設けられた。

シナリオ内容

援助場面のシナリオは、二種類用意した。一つは、倒れた自転車を起こすのを手伝う援助場面であり、もう一方は、踏切内で転倒した子どもを救助する援助場面であった。この2つのシナリオは、「援助行動に伴うリスク」の操作に対応しており、自転車場面が低リスク条件、踏切場面が高リスク条件である。高木（1982）において、援助コスト（援助行動に伴う自己犠牲）は、努力、金銭、時間、危険などの側面から捉えられている。自転車場面と踏切場面の援助シナリオはいずれも、努力、金銭、時間コストがそれほど小さくなく、危険（リスク）以外の援助コストがある程度統制されることを想定し作成した。

シナリオ内の登場人物は、援助者が男子大学生、被援助者が男子中学生であった。一方、観察者については、同じ大学の学生であることがわかる記述に留め、性別については記述しなかった。観察者の性別による違いをみることが本研究の目的ではなかったため、実験計画を可能な限り単純化するという趣旨で、観察者の性別に関する記述は行わなかった。シナリオには、援助者や被援助者の心情などは記述せず、客観的に見て把握できる情報のみを記述することに

留意して作成した。Appendix 1 参照。

測定項目

第1に、援助者に対する印象について測定した。これは、良い－悪いという印象次元であり、広範な意味を含んでいることから、第三者が援助者について行う総合評価の指標として位置づけている。「手助けをした男子学生Aに対して、あなたはどのような印象を持ちましたか。下記の各項目についてどのくらい当てはまるか、1～7の選択肢のうち一つに○を付けてお答え下さい。」という教示文を与え、各項目に対して「1. 全く当てはまらない」～「7. 非常に当てはまる」の7件法で回答してもらった。山本・田中（2018）で使用された項目を参考に、計8つの項目を新たに作成した（Table 1）。

第2に、動機推測について測定した。これは、第三者が援助者に対して推測した動機について測定するものであるが、以下の3つに分類される。一つ目は、「観察者に対する自己呈示動機」であり、二つ目は、「被援助者に対する自己呈示動機」である。自己呈示の対象は、観察者と被援助者の二通りが想定される。そのため、両者を区別するために、自己呈示の対象ごとに測定項目を設けた。三つ目は、「利他的動機」であった。「男子学生Aは、どのような気持ちから男子中学生Bを手助けしたと思いますか。下記の各項目についてどのくらい当てはまるか、1～7の選択肢のうち一つに○を付けてお答え下さい。」という教示文を与え、各項目に対して「1. 全く当てはまらない」～「7. 非常に当てはまる」の7件法で回答してもらった。項目は、「観察者に対する自己呈示動機」を6つ、「被援助者に対する自己呈示動機」を6つ、「利他的動機」を7つ設けた（Table 1）。それぞれの項目は、山本・田中（2018）で使用された項目を参考にし、またVandenBos（2007）に記載されている「利己性（selfishness）」と「利他性（altruism）」の定義に則り作成した。ただし、利己性の定義は「たとえ他者が不利益を被ったとしても、過度にあるいは専ら自己に利益を生むように行動する傾向」とされ、この自己利益には、自分の好感度の向上を追求するという社会的な報酬のほか、金銭などの物質的な報酬なども含まれる（Batson, Ahmad, Powell, & Stocks, 2008）。本研究は、観察者の存在によって自己呈示動機の推測が促される可能性について検討するため、その手がかりから推測される動機の内容は、物質的な報酬よりも、社会的な報酬を追求しようとする利己的動機の方が推測されやすいと想定される。したがって、利己的動機の中でも、社会的な報酬（良い評判の獲得）を求めるといふ自己呈示動機に焦点化した内容で項目作成を行った。一方、利他性は、「明らかに利己的でない、他者に対する気遣い、あるいは個人のコストが発生する中で他者に利益を与える行動」と定義され、「利他的動機」については、この定義に沿うように項目を作成した。

第3に、自己呈示文脈の認識について測定した。これは、観察者の存在に関する実験操作が適切に行われていたか確認するための操作チェックの項目である。「男子学生Aが置かれていた状況についてお尋ねします。下記の各項目についてどのくらい当てはまるか、1～7の選択肢のうち一つに○を付けてお答え下さい。」という教示文を与え、各項目に対して「1. 全く当

Table 1
測定項目一覧

援助者に対する 印象	不快に感じた 反感を持った 悪い印象を持った 否定的な印象を持った 良い印象を持った 肯定的な印象を持った 快く感じた 好ましく思った
観察者に対する 自己呈示動機	周囲の人の目を意識してのものだった 周囲の人に対して自分を取り繕うためのものだった 周囲の人に対して自分を良く見せようとしていた 周囲の人に対して自分にとって望ましい印象を与えようとした 周囲の人からの評価を気にしていた 周囲の人に対して自分の親切な一面を見せたかった
被援助者に対する 自己呈示動機	男子中学生Bの目を意識してのものだった 男子中学生Bに対して自分を取り繕うためのものだった 男子中学生Bに対して自分を良く見せようとしていた 男子中学生Bに対して自分にとって望ましい印象を与えようとした 男子中学生Bからの評価を気にしていた 男子中学生Bに対して自分の親切な一面を見せたかった
利他的動機	善意から来るものであった 他者を思いやってのものだった 良心から来るものであった 男子中学生Bを配慮してのものであった 親切心から来るものであった 献身的な気持ちによるものだった 自分の利益を度外視してのものだった
自己呈示文脈	男子学生Aの行いは、男子中学生B以外の人たちに見られている状況であった 男子学生Aは、男子中学生B以外の人に対して、自己アピールをすることができる状況にいた 男子学生Aは、男子中学生B以外の人から、自分に対して好意的な印象を持ってもらえる状況であった 男子学生Aは、男子中学生B以外の人と、今後、関係を築きやすくなった
リスク	男子学生Aの行動は、自分の身に危険が及ぶものであった 男子学生Aの行動は、自己犠牲が大きいものであった 男子学生Aの行動は、安全性の低いものであった 男子学生Aの行動は、自分に不利益が生じるものであった

てはまらない」～「7.非常に当てはまる」の7件法で回答してもらった。4つの項目を独自に作成した（Table 1）。

第4に、援助行動に伴うリスクの認識について測定した。これは、援助行動に伴うリスクに関する実験操作が適切であったかを確認するための操作チェックの項目である。「男子学生Aが取った行動についてお尋ねします。下記の各項目についてどのくらい当てはまるか、1～7の選択肢のうち一つに○を付けてお答え下さい。」という教示文を与え、各項目に対して「1.全く当てはまらない」～「7.非常に当てはまる」の7件法で回答させた。4つの項目を独自に作成した（Table 1）。

Table 2
各条件における平均値と標準偏差

	<i>n</i>	高リスク			低リスク		
		観察者不在	関係非予期 観察者	関係予期 観察者	観察者不在	関係非予期 観察者	関係予期 観察者
印象 (<i>a</i> = .95)	<i>M</i> <i>SD</i>	5.49 1.37	5.82 0.99	5.94 0.95	6.30 0.98	6.38 0.65	6.19 0.84
自己呈示動機a (<i>a</i> = .95)	<i>M</i> <i>SD</i>	2.09 1.14	3.29 1.53	3.37 1.66	2.63 1.51	3.95 1.42	4.31 0.94
自己呈示動機b (<i>a</i> = .92)	<i>M</i> <i>SD</i>	2.51 1.17	2.62 1.14	2.47 1.30	3.73 1.28	3.38 1.34	3.38 1.18
利他的動機 (<i>a</i> = .89)	<i>M</i> <i>SD</i>	5.91 0.77	5.69 1.00	6.02 0.69	5.82 0.56	5.56 0.65	5.72 0.74
自己呈示文脈 (<i>a</i> = .86)	<i>M</i> <i>SD</i>	2.28 1.10	4.91 0.77	5.04 0.99	2.43 1.32	4.56 0.63	5.05 0.87
リスク (<i>a</i> = .91)	<i>M</i> <i>SD</i>	5.55 0.77	5.03 0.93	5.07 1.21	2.97 0.99	2.06 0.86	1.93 0.78

注) 自己呈示動機aは「観察者に対する自己呈示動機」、自己呈示動機bは「被援助者に対する自己呈示動機」を表している。

結果

記述統計

欠損および未回答により回答結果に不備のあった34名のデータを除き、171名のデータを分析に使用した。各尺度の作成に際し、想定されていた項目構成が適切であったか確認した。「利他的動機」の尺度に含まれる「自分の利益を度外視してのものだった」という1項目が、その他の項目との相関が顕著に低く信頼性係数 (*a* 係数) を下げていたため、これを除外し、計6項目により尺度を構成した。「利他的動機」以外の尺度については、除外した項目はなく、想定していた項目構成で尺度を作成した。それぞれの尺度は.80以上の *a* 係数が示され、内的整合性は十分高いことを確認している。Table 2に、各条件における各尺度得点の平均値と標準偏差、並びに *a* 係数を、Table 3に測定した変数間の相関行列を示す。

操作チェック

本実験の条件操作により、援助場面に観察者が存在していたこと、またその観察者に対して援助者が自己呈示を行うことが可能であったことについて、参加者が適切に認識していたかを確認するため、「自己呈示文脈」を従属変数とした計画対比を行った。

観察者がいない状況と観察者がいる状況で比較するため、観察者がいない状況を-1、関係が予期されない観察者がいる状況を1/2、関係が予期される観察者がいる状況を1/2と重みづけた。Leveneの誤差分散の等質性検定の結果、分散の等質性が保証されていなかったため、等

Table 3
相関行列

	印象	自己呈示 動機 a	自己呈示 動機 b	利他的動機	自己呈示 文脈	リスク
印象	—	-.03	-.02	.42 **	.09	-.23 **
自己呈示動機 a		—	.55 **	-.39 **	.54 **	-.27 **
自己呈示動機 b			—	-.27 **	.07	-.30 **
利他的動機				—	-.12	.21 **
自己呈示文脈					—	-.13 †

注) ** $p < .01$, † $p < .10$ (両側)。自己呈示動機 a は「観察者に対する自己呈示動機」、自己呈示動機 b は「被援助者に対する自己呈示動機」を表している。

分散を仮定しない対比検定を行った。その結果、観察者がいない状況 ($M = 2.36$) に比べて、観察者がいる状況 ($M = 4.89$) の方が、自己呈示を行うことが可能で、自己呈示の成果が得られやすい状況と認知されていた ($t(83) = 14.27, p < .001$)。

関係が予期されない観察者がいる状況と、関係が予期される観察者がいる状況で比較するため、観察者がいない状況を 0、関係が予期されない観察者がいる状況を -1、関係が予期される観察者がいる状況を 1 と重みづけた。Levene の誤差分散の等質性検定の結果、分散の等質性が保証されていなかったため、等分散を仮定しない対比検定を行った。その結果、関係が予期されない観察者がいる状況 ($M = 4.73$) に比べて、関係が予期される観察者がいる状況 ($M = 5.05$) の方が、自己呈示を行うことが可能で、自己呈示の成果が得られやすい状況と認知されていた ($t(108) = 2.05, p < .05$)。以上より、観察者の存在についての実験操作が適切に働いていたことが確認された。

自転車場面と踏切場面の間で、援助行動に伴うリスクに差があると参加者が認知していたかを確認するため、「リスク」を従属変数とした対応のない t 検定を行った。Levene の誤差分散の等質性検定において、分散の等質性が保証されていたため、等分散を仮定し検定を行った。その結果、自転車場面 ($M = 2.31$) よりも、踏切場面 ($M = 5.22$) の方が、援助行動に伴うリスクが高いと認知されていた ($t(169) = -19.14, p < .001$)。したがって、援助場面によって援助行動に伴うリスクが適切に操作できていたことが確認された。

自己呈示動機の推測

仮説を検証するため、観察者に対する自己呈示動機を従属変数として、階層的重回帰分析を行った。実験条件の変数については、以下のコントラスト変数を作成し分析に投入した。観察者 C_1 (観察者がいない状況 = -2/3, 関係が予期されない観察者がいる状況 = 1/3, 関係が予期される観察者がいる状況 = 1/3) は、観察者がいない状況と観察者がいる状況との比較を表す。観察者 C_2 (観察者がいない状況 = 0, 関係が予期されない観察者がいる状況 = -1/2, 関係が予期される観察者がいる状況 = 1/2) は、関係が予期されない観察者がいる状況と、関

Table 4
 観察者に対する自己呈示動機についての重回帰分析

	β	
	Step1	Step2
観察者 C ₁ (存在 vs. 不在)	.42 ***	.42 ***
観察者 C ₂ (非予期 vs. 予期)	.06	.06
リスク	-.23 ***	-.23 **
観察者 C ₁ × リスク		-.04
観察者 C ₂ × リスク		-.04
調整済み R ²	.22 ***	.21 ***
ΔR^2 Step1 → Step2		.00

注) *** $p < .001$, ** $p < .01$ 。

係が予期される観察者がいる状況との比較を表す。リスク（低リスク = -1/2, 高リスク = 1/2）は、自転車場面（低リスク条件）と踏切場面（高リスク条件）の比較を表す。

階層的重回帰分析の結果を Table 4 に示す。Step 1 では、実験条件である上記三つのコントラスト変数を独立変数として投入した。Step 2 では、観察者 C₁ × リスク、観察者 C₂ × リスクの二つの交互作用項も投入した。結果、Step 1 ($R^2 = .22, p < .001$) と Step 2 ($R^2 = .21, p < .001$) は、いずれのモデルも有意であったが、Step 1 から Step 2 への R^2 の変化量が有意でなかったため ($\Delta R^2 = .00, n.s.$)、Step 1 の重回帰モデルを採択した。Step 1 のモデルにおいて、観察者 C₁ の正の効果が有意であり ($\beta = .42, p < .001$)、観察者がいない状況に比べて、観察者がいる状況の方が、第三者は援助者に対して自己呈示動機を推測しやすいことが示された。一方、観察者 C₂ の効果は有意でなく ($\beta = .06, n.s.$)、観察者との関係予期の有無によって自己呈示動機の推測の程度に差はみられなかった。また、リスクの負の効果が有意であり ($\beta = -.23, p < .001$)、低リスクの援助に比べて、高リスクの援助の方が、第三者は援助者に対して自己呈示動機を推測しにくくなることが示された。以上、観察者 C₁ の効果は予測を支持する結果であったが、観察者 C₂ の効果は有意でなく予測を支持していなかった。

利他的動機の推測

利他的動機を従属変数として、階層的重回帰分析を行った。階層的重回帰分析の結果を Table 5 に示す。Step 1 では、実験条件である上記三つのコントラスト変数を独立変数として投入した。Step 2 では、観察者 C₁ × リスク、観察者 C₂ × リスクの二つの交互作用項も投入した。Step 3 では、観察者に対する自己呈示動機、被援助者に対する自己呈示動機の主効果を独立変数として投入した。これら自己呈示動機の変数については中心化を行った上で、分析に投入している。結果、Step 1 のモデル ($R^2 = .02, p < .10$) は有意傾向にとどまり、Step 2 のモデル ($R^2 = .01, n.s.$) は有意でなかった一方、Step 3 のモデル ($R^2 = .16, p < .001$) は有意であり、Step 2 から Step 3 への R^2 の変化量が有意であったため ($\Delta R^2 = .15, p < .001$)、Step 3 の重回

Table 5
利他的動機についての重回帰分析

	β		
	Step1	Step2	Step3
観察者 C ₁ (存在 vs. 不在)	-.07	-.07	.10
観察者 C ₂ (非予期 vs. 予期)	.14 †	.14 †	.16 *
リスク	.12	.11	.01
観察者 C ₁ × リスク		.04	.03
観察者 C ₂ × リスク		.05	.03
自己呈示動機 a			-.43 ***
自己呈示動機 b			-.02
調整済み R ²	.02 †	.01	.16 ***
$\Delta R^2_{\text{Step1} \rightarrow \text{Step2}}$.00	
$\Delta R^2_{\text{Step2} \rightarrow \text{Step3}}$.15 ***

注) *** $p < .001$, * $p < .05$, † $p < .10$ 。自己呈示動機 a は「観察者に対する自己呈示動機」、自己呈示動機 b は「被援助者に対する自己呈示動機」を表している。

帰モデルを採択した。Step 3 のモデルにおいて、観察者に対する自己呈示動機の負の効果が有意であり ($\beta = -.43, p < .001$)、第三者は援助者に対して自己呈示動機を推測するほど、利他的動機の推測を割り引くことが示された。一方、予測に反して、観察者 C₂ の正の効果が有意であり ($\beta = .16, p < .05$)、援助者との関係が予期されない観察者がいる状況に比べて、関係が予期される観察者がいる状況の方が、第三者は援助者に対して、利他的動機を推測しやすくなることが示された。

印象評定

援助者に対する印象を従属変数として、階層的重回帰分析を行った。その結果を Table 6 に示す。Step 1 では、実験条件である上記三つのコントラスト変数（観察者 C₁、観察者 C₂、リスク）を独立変数として投入した。Step 2 では、上記三つのコントラスト変数に加えて、観察者に対する自己呈示動機の主効果の変数を投入した。Step 3 以降のモデルでは、観察者の存在とリスク、動機推測とリスクの交互作用についても探索的に検討した。Step 3 では、リスクとの交互作用について確認することを目的として、観察者 C₁ × リスク、観察者 C₂ × リスク、観察者に対する自己呈示動機 × リスクの三つの交互作用項を投入した。Step 4 では、被援助者に対する自己呈示動機と、利他的動機の主効果の変数を投入した。同時に、被援助者に対する自己呈示動機 × リスクと、利他的動機 × リスクの二つの交互作用項も投入した。なお、観察者に対する自己呈示動機、被援助者に対する自己呈示動機、利他的動機の変数は連続変数であるため、中心化を行っている。

Step 1 ($R^2 = .06, p < .001$)、Step 2 ($R^2 = .08, p < .001$)、Step 3 ($R^2 = .08, p < .001$)、Step 4 ($R^2 = .27, p < .001$) のいずれのモデルも有意となった。Step 3 から Step 4 への R^2 の変化量が有意

Table 6
援助者に対する印象についての重回帰分析

	β			
	Step1	Step2	Step3	Step4
観察者 C ₁ (存在 vs. 不在)	.09	.15 †	.14 †	.08
観察者 C ₂ (非予期 vs. 予期)	-.02	-.01	-.01	-.09
リスク	-.26 ***	-.30 ***	-.30 ***	-.32 ***
自己呈示動機 a		-.16 †	-.15 †	.11
観察者 C ₁ × リスク			.13	.07
観察者 C ₂ × リスク			.06	.03
自己呈示動機 a × リスク			-.08	.03
自己呈示動機 b				-.07
利他的動機				.48 ***
自己呈示動機 b × リスク				-.08
利他的動機 × リスク				.05
調整済み R ²	.06 ***	.08 ***	.08 ***	.27 ***
$\Delta R^2_{Step1 \rightarrow Step2}$.02 †		
$\Delta R^2_{Step2 \rightarrow Step3}$.02	
$\Delta R^2_{Step3 \rightarrow Step4}$.20 ***

注) *** $p < .001$, † $p < .10$ 。自己呈示動機 a は「観察者に対する自己呈示動機」、自己呈示動機 b は「被援助者に対する自己呈示動機」を表している。

であったため ($\Delta R^2 = .20, p < .001$)、Step 4 の重回帰モデルを採択した。この Step 4 のモデルでは、印象に影響すると仮説で想定していた、観察者に対する自己呈示動機は有意に影響していなかった ($\beta = .11, n.s.$)。有意な影響がみられたのは、リスクの主効果と利他的動機の主効果であった。リスクの負の効果が有意であり ($\beta = -.32, p < .001$)、低リスクの援助に比べて、高リスクの援助の方が、援助者に対する評価が低下することが示された。また、利他的動機の正の効果が有意であり ($\beta = .48, p < .001$)、第三者は援助者に対して利他的動機を推測するほど、援助者に対する評価が向上しやすいことが示された。以上、自己呈示動機の推測は評価に影響しておらず、予測が支持されなかった一方で、利他的動機の推測は評価に影響することが示された。また、リスクの影響については、観察者に対する自己呈示動機の推測値を従属変数とした場合の結果と、援助者の印象を従属変数とした場合の結果で、矛盾する傾向が示された。すなわち、低リスクの援助に比べて、高リスクの援助の方が、第三者は援助者に対して自己呈示動機を推測しにくいにもかかわらず、援助者に対する評価が低下しやすいことが示された。

パス解析による心的過程の検討

観察者の存在および援助に伴うリスクが動機推測に影響を及ぼし、動機推測を介して印象に影響を及ぼすという一連の影響過程を確認するため、SEMによるパス解析（最尤法）を行っ

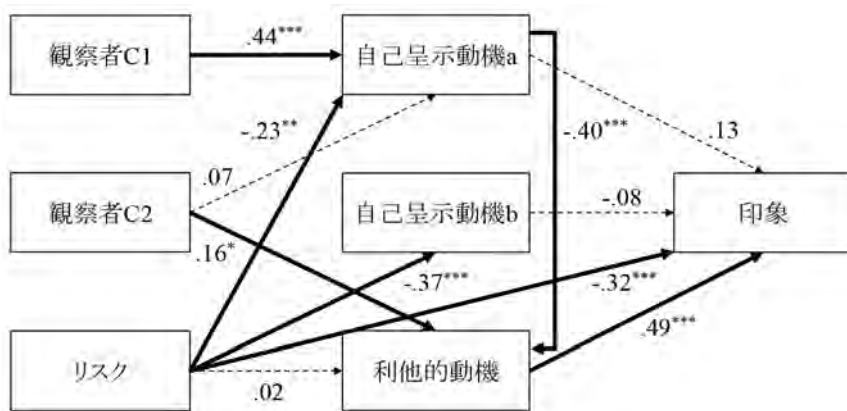


Figure 2. モデル1におけるパス解析の結果

注) *** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$ 。CFI = 1.000, RMSEA = 0.004, AIC = 1893.638。有意であったパスを太線、非有意であったパスを破線で示す。自己呈示動機 a は「観察者に対する自己呈示動機」、自己呈示動機 b は「被援助者に対する自己呈示動機」を表している。図中では省略しているが、自己呈示動機 a・b の誤差間の相関は、 $r = .60$ であった。外生変数の平均、分散、外生変数間の共分散は、モデルで推定されるパラメータに含まれていない。

た。分析にはMplus (Version 7.4; Muthén & Muthén, 2015) を用いた。外生変数の平均、分散、外生変数間の共分散は、モデルで推定されるパラメータに含めなかった。間接効果については、ブートストラップ法により、サンプル抽出を20000回行い、信頼区間を推定した。

まずFigure 2に示したモデル1では、仮説モデルで想定していたパスと、仮説では想定していなかったものの、重回帰分析の結果、有意な影響を示していたパスをパラメータとして設けた。モデル1の適合度は、CFI = 1.000, RMSEA = 0.004, AIC = 1893.638であり、モデルの妥当性が確認された。

しかしながら、モデル1では、いくつか有意でなかったパスも含まれていたため、それらのパスを削除し、モデルの改善を行った。これをモデル2とし、Figure 3にその結果を示す。モデル2の適合度は、CFI = 0.998, RMSEA = 0.017, AIC = 1890.093であり、こちらもモデルの妥当性が確認された。ただし、AIC値を参照すれば、モデル1よりもモデル2の方が、より良いモデルであると判断されたため、本稿では、Figure 3に示したモデル2の結果について報告する。

モデル2において、観察者の存在および援助に伴うリスクが、動機推測に及ぼす影響について以下のことが示された。観察者C₁が観察者に対する自己呈示動機に及ぼす直接効果が有意であり ($\beta = .44, p < .001$)、観察者がいない状況に比べて、観察者がいる状況の方が、援助者に自己呈示動機が推測されやすいことが示された。リスクが観察者に対する自己呈示動機に及ぼす直接効果が有意であり ($\beta = -.23, p < .01$)、リスクの低い援助に比べて、リスクの高い援助の方が、援助者に自己呈示動機が推測されにくくなることが示された。リスクが被援助

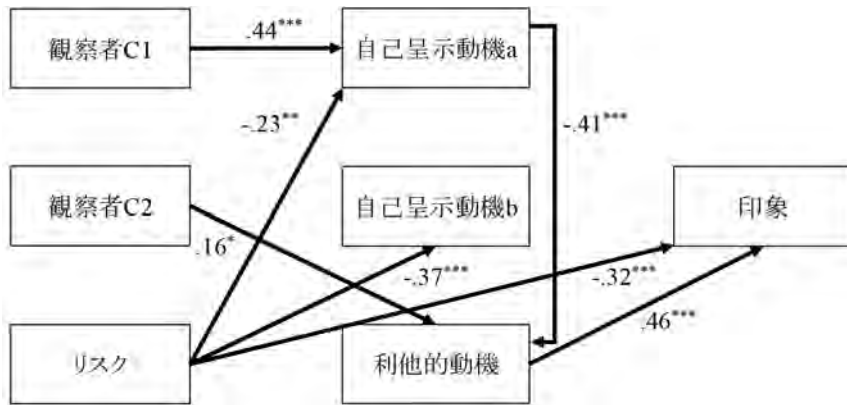


Figure 3. モデル 2 におけるパス解析の結果

注) *** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$. CFI = 0.998, RMSEA = 0.017, AIC = 1890.093. 有意であったパスを太線、非有意であったパスを破線で示す。自己呈示動機 a は「観察者に対する自己呈示動機」、自己呈示動機 b は「被援助者に対する自己呈示動機」を表している。図中では省略しているが、自己呈示動機 a・b の誤差間の相関は、 $r = .60$ であった。外生変数の平均、分散、外生変数間の共分散は、モデルで推定されるパラメタに含まれていない。

者に対する自己呈示動機に及ぼす直接効果も有意であり ($\beta = -.37, p < .001$)、リスクの低い援助に比べて、リスクの高い援助の方が、援助者に自己呈示動機が推測されにくくなることが示された。予測では想定していなかったが、観察者 C₂ が利他的動機に及ぼす直接効果が有意であり ($\beta = .16, p < .05$)、関係が予期されない観察者がいる状況に比べて、関係が予期される観察者がいる状況の方が、援助者に利他的動機が推測されやすいことが示された。観察者に対する自己呈示動機が利他的動機に及ぼす直接効果が有意であり ($\beta = -.41, p < .001$)、観察者に対する自己呈示動機が推測されるほど、利他的動機が推測されにくくなることが示された。

次に、援助者に対する印象に影響を及ぼす過程について示す。利他的動機が印象に及ぼす直接効果が有意であり ($\beta = .46, p < .001$)、援助者に利他的動機を推測するほど、援助者に対する評価が向上することが示された。また、リスクが印象に及ぼす直接効果も有意であり ($\beta = -.32, p < .001$)、リスクの低い援助に比べて、リスクの高い援助の方が、援助者に対する評価が低下しやすいことが示された。観察者に対する自己呈示動機から、利他的動機を介して、印象に影響を及ぼすという間接効果が有意であり ($B = -0.12, 99\% \text{ CI } [-0.20, -0.06]$)、援助者に対して自己呈示動機が推測されると、利他的動機が推測されにくくなり、援助者に対する評価が低下することが示された。観察者 C1 から観察者に対する自己呈示動機を介し、さらに利他的動機を介して、印象に影響を及ぼす間接効果が有意であり ($B = -0.18, 99\% \text{ CI } [-0.32, -0.09]$)、観察者がいる状況の方が、援助者に自己呈示動機が推測されやすく、その結果、利他的動機が推測されにくくなり、援助者に対する評価が低下しやすいことが示された。リスク

が観察者に対する自己呈示動機を介し、さらに利他的動機を介して、印象に影響を及ぼす間接効果が有意であり ($B = 0.09$, 99% CI [0.02, 0.21])、リスクの高い援助の方が、援助者に自己呈示動機が推測されにくく、その結果、利他的動機が推測されやすくなり、援助者に対する評価が向上しやすいことが示された。このリスクが動機推測を介して印象に及ぼす間接効果は、リスクが印象に及ぼす直接効果と逆の傾向が示された。

考察

本研究は、自己呈示理論とコスト信号理論に関する二つの素朴理論に基づいて動機推測を行うという観点から、第三者が援助者に自己呈示動機を推測する際の手がかりについて検討した。その結果、観察者がいない状況よりも、観察者がいる状況の方が、第三者は援助者に自己呈示動機を推測しやすくなることが示され、自己呈示理論に基づく予測1は支持された。しかし、援助者との関係予期の有無により、自己呈示動機の推測の程度に差はみられず、予測2は支持されなかった。一方、リスクの低い援助行動よりも、リスクの高い援助行動の方が、第三者は援助者に自己呈示動機を推測しにくくなるというコスト信号理論を素直に踏まえた場合の予測と一致する傾向が示された。したがって、予測3-1が支持され、予測3-2は支持されなかった。また、自己呈示動機を推測しても、評価には影響しておらず、予測4も支持されなかった。一方、自己呈示動機を推測した結果、利他的動機の推測が割り引かれ、評価が低下することが示され、予測5は支持された。さらに、予測では想定していなかったが、リスクが印象評価に及ぼす影響は、直接効果と、動機推測を介した間接効果では、逆の傾向が示された。

本研究で得られた重要な知見は、以下の三点である。第一に、観察者の存在が動機推測の手がかりとして機能することが明らかにされた点である。第二に、その結果から第三者が素朴に保持している自己呈示理論に基づいて動機推測を行っているという心的メカニズムが示唆された点である。第三に、援助コストも動機推測に影響を及ぼすことが確認された点である。

自己呈示理論に基づく動機推測

本研究は、山本・田中（2018）において指摘されていたシナリオ設定上の問題点を改善し、観察者の存在が動機推測に及ぼす影響について再検討した。その結果、観察者がいない状況よりも、観察者がいる状況の方が、第三者は援助者に自己呈示動機を推測しやすいことが示された。この結果に基づき、第三者は素朴に保持する自己呈示理論に基づいて、援助者の動機を推測していることが示唆された。山本・田中（2018）の研究では、シナリオ設定上の問題によって、観察者の存在が動機推測の手がかりとして機能していなかったと推察される。

ただし、本研究では、援助場面に居合わせている観察者が、援助者と今後関わるであろうという予期の有無により、自己呈示動機の推測の程度に差がみられていない。これは一見すると仮説を反証する結果である。しかし、これは関係予期という手がかりだけでは、本研究で想定

していたような「友人獲得」のために自己が好ましい人物であることをアピールするという具体的な自己呈示目標を、参加者が想起できなかったことが反映されている可能性がある。例えば、学校のクラスやサークルなどにおける集団では、その集団成員間で将来にわたっての関係が予期される。しかし、今後関わりを持つことが予期されるからといって、その集団成員全員と友好的な関係を結ぼうと考える者は稀であろう。つまり、関係予期という要因のみでは、「友人獲得」という目標は想起されにくい可能性が指摘される。本研究は、関係の予期によって、具体的な自己呈示目標の想起のしやすさを操作することを意図していたが、結果は、関係予期により自己呈示動機の推測の程度に差がみられず、自己呈示目標を想起させる操作が不十分であったと考えられる。したがって、この結果は、第三者が素朴に保持している自己呈示理論に基づいて動機推測を行っているという仮説を必ずしも反証するものではないといえよう。今後の研究において、自己呈示目標との関連度を効果的に操作するための工夫が必要である。

また、観察者がいない条件における参加者が、「周囲の人の目を意識してのものだった」などの自己呈示動機の項目に対して、適切に回答できていたかということに留意する必要がある。観察者がいない条件における参加者が、シナリオ上に観察者が存在しないため、この項目に対して違和感を覚えた可能性が高い。これが結果に影響を与えている可能性は完全に否定することはできない。しかしながら、シナリオ上に観察者がいない以上、参加者は援助者が観察者に対して自己呈示をしようとしていた可能性を低く見積もるしかないと考えられる。参加者がこれらの項目に違和感があったとしても、低い得点に評定するしかなかったとするならば、これによりデータが歪んだ可能性は低いと想定される。ただし、実際にどれほどの影響があったのか不明であるため、この点に注意しておく必要がある。

援助コストが動機推測および評価に及ぼす影響

本研究により、低リスクの援助よりも、高リスクの援助の方が、第三者は援助者に自己呈示動機を推測しにくくなることが示された。よって、第三者が素朴に保持しているコスト信号理論に基づき、援助者が自分を周囲にアピールするために、あえて危険を伴う援助行動を行ったと推測するという仮説は支持されず、コスト信号理論を素直に踏まえた場合の仮説が支持された。これは、これまで実証的に明らかにされていなかった部分であり、有意義な知見である。

ただし、本研究における援助コストの操作には、一つ問題が残されており、コスト信号理論を素直に踏まえた場合の予測が支持された背景に、これが関与している可能性に留意しておく必要がある。本研究では、自転車を起こす援助場面を低リスク条件、踏切内で転倒した子どもが電車に轢かれそうなところを救助する援助場面を高リスク条件とした。この方法では、リスクが操作されると同時に、被援助者にもたらされる恩恵も操作されていることになる。被援助者への恩恵は前者より後者のほうが人命救助にかかわる点で明らかに大きいからである。被援助者への恩恵が大きい場合、恩恵が小さい場合よりも、第三者は援助者に対して、他者への恩恵を目的とする利他的動機をより強く推測しやすくなるかもしれない。この可能性を踏まえ

ば、自転車場面よりも、踏切場面の方が、援助者に自己呈示動機が推測されにくくなるという本結果は、高い援助コストが思いやりのシグナルとして受け取られやすかったことを反映しているのか、他者への恩恵が大きいことから利他的動機が強く推測されやすかったことを反映しているのか明白ではない。したがって、被援助者にもたらされる恩恵の大きさを統制した上で援助コストを操作すれば、第三者は素朴に保持しているコスト信号理論に基づき動機推測を行うために、高コストの援助の場合に、かえって自己呈示動機を推測しやすくなるという予測が支持される可能性も残されている。

しかしながら、援助コストを操作する際に、この要因の交絡を防ぐことは容易ではない。より単純な援助コストの操作例として、寄付場面における寄付の金額が少額である条件と高額である条件で比較する方法が挙げられるが、この場合においても、寄付額の大きさに比例して、被援助者にもたらせる恩恵も大きくなる。このように要因の交絡を防ぐことは容易ではないが、今後の研究ではやはり、この点を考慮した実験操作が望まれる。

一方、援助コストが印象評価に及ぼす直接効果と、動機推測を介した間接効果は、正負が逆転する傾向を示していた。すなわち、直接効果の場合、低リスクの援助よりも、高リスクの援助の方が、援助者に対する評価が低下しやすかった。一方、間接効果の場合、低リスクの援助よりも、高リスクの援助の方が、第三者は援助者に対して、自己呈示動機を推測しにくく、利他的動機を推測しやすいために、援助者に対する評価が向上しやすかった。前者の影響については、第三者が、命の危険が伴う行動を、倫理的な観点から不適切な行動とみなした可能性が考えられる。このように援助に伴うコストが、動機推測の過程を経ずに、直接的に援助者の評価に影響を及ぼすことが示された点は、予想外の結果ではあったが、高リスクの援助行動が、本研究で扱った援助場面以外においても一般的に、倫理的な観点で不適切と判断されるのか、今後において検討する価値があろう。

評価に至るまでの一連の心的過程

パス解析の結果から、観察者の存在や援助に伴うリスクに基づいて、第三者は援助者に自己呈示動機を推測し、それにより利他的動機の推測を割り引き、援助者に対する評価が低下するという心的メカニズムが示唆された。状況手がかりをもとに、援助者に対して自己呈示動機が推測され、その結果、利他的動機の推測が割り引かれるという本結果は、Reeder et al. (2004)の多重推論モデルにおいて想定されていた傾性帰属の過程と整合するものであった。Reeder et al. (2004)において示されていた帰属過程が、傾性帰属だけでなく、動機推測においても同様にみられることを示した点は重要である。さらに、そのような帰属過程を経て、援助者に対する最終的な評価が規定されることを示した点も重要である。

一方、Alicke et al. (2013)の偽善判断の知見に基づき、自己呈示動機の推測が、直接的に印象評価に影響を及ぼす過程も想定していたが、そのパスは有意に示されなかった。これは、自己呈示動機の推測の程度が顕著に低かったことが原因であると考えられる。Table 2に示して

いる観察者に対する自己呈示動機についての各条件の平均値を参照すると、ほとんどの条件で中点である4点を下回っている。このように、自己呈示動機の推測の程度が低かった原因としては、自己呈示目標の内容が関係している可能性が考えられる。本研究では、援助者との関係予期の有無という観察者の特性を操作することで、参加者が援助者に対して、「友人獲得」という自己呈示目標を想起するために、動機の邪推が生じ、印象が否定的になると予測していた。しかし、「友人獲得」は、他者と積極的に友好関係を築こうとする社会的に望ましい目標である。そのため、参加者が援助者に「友人獲得」目標に基づいた自己呈示動機を推測していたとしても、印象に影響しなかった可能性がある。今後においては、より自己利益を追求する内容の自己呈示目標を参加者に想起させる操作が必要である。

予測に反して、援助者との今後の関係が予期されない観察者（見知らぬ大学生）がいる状況に比べて、関係が予期される観察者（同じサークルのメンバー）がいる状況の方が、援助者に利他的動機が推測されやすくなるという結果も示された。この結果は、観察者が見知らぬ大学生である場合よりも、同じサークルのメンバーである場合のほうが、第三者は援助行動を好意的にみやすく動機の邪推が起りにくいことを示しており、少なくとも本研究の前提とは逆の結果といえる。その理由は本研究からは明らかにならないが、見ず知らずの他人の前より家族や友人など親しい関係にある人たちの前でなされる社会的に望ましい行為のほうが、好意的にとらえられやすいのだとすれば、それがなぜなのか心理的背景について今後検討する価値がある。

本研究の意義と今後の課題

本研究は、第三者が援助者の動機を推測する際の心的メカニズムについて一つの示唆を得た。序論でも述べたように、援助者に対する批判を抑制するための方策を見出すためには、第三者が援助者を批判する心理的背景を明らかにする必要がある、本研究はその心的メカニズムの一端を解明した点で意義がある。今後においては、ここまで述べた方法論上の問題点の改善を図り、第三者が援助者を否定的に評価する心的メカニズムについてのさらなる解明が望まれる。

【注】

- 1) 本論文は第一著者が平成29年度に大阪市立大学大学院文学研究科に提出した修士論文の一部に加筆、修正を行い、まとめ直したものである。本論文の一部は、日本社会心理学会第58回大会で発表している。
- 2) 山本・田中（2018）によれば、観察者とは、第三者と同義であり、援助行動に直接関与しない立場にいる者を指す。ただし、援助場面を見ている主体としての第三者と援助場面の背景の一部となる客体としての第三者（観察者）を便宜上区別する必要がある。本研究は、山本・田中（2018）に則り、前者を第三者、後者を観察者と呼称している。
- 3) 本研究では、自己呈示動機を「他者が自己に対して好意的な印象を抱くように働きかけようとする動機」と独自に定義する。本研究では、これを利己的動機の一側面として位置づけている。

【引用文献】

- Alicke, M., Gordon, E., & Rose, D. (2013). Hypocrisy: What counts?. *Philosophical Psychology*, 26, 673-701.
- Batson, C. D., Ahmad, N., Powell, A. A., & Stocks, E. L. (2008). Prosocial motivation. In Y. S. James & W. L. Gardner (Eds), *Handbook of motivation science*. NY: Guilford Press.
- Carlson, R. W., & Zaki, J. (2018). Good deeds gone bad: Lay theories of altruism and selfishness. *Journal of Experimental Social Psychology*, 75, 36-40.
- Cottrell, N. B., Wack, D. L., Sekerak, G. J., & Rittle, R. H. (1968). Social facilitation of dominant responses by the presence of an audience and the mere presence of others. *Journal of personality and social psychology*, 9, 245-250.
- 針原素子 (2015). 向社会的行動が「偽善」と判断される時—推測された動機が及ぼす影響— 日本心理学会第79回大会発表論文集, 284.
- Havighurst, R. J. (1972). *Developmental tasks and education*. 3rd ed. New York: David McKay Company Inc. (児玉憲典・飯塚裕子 (訳) (1997). ハヴィグーストの発達課題と教育: 生涯発達と人間形成 川島書店)
- Iredale, W., Van Vugt, M., & Dunbar, R. (2008). Showing off in humans: Male generosity as a mating signal. *Evolutionary Psychology*, 6, 386-392.
- 伊藤 公一郎・池上 知子 (2006). 動機と行動の関連性についての素朴理論 心理学研究, 77, 415-423.
- Ito, K., & Takai, J. (2006). Positive-negative asymmetry in mental state inference: Replication and extension. *Psychologia*, 49, 267-277.
- 河村悠太・楠見孝 (2017). 過剰な利他主義者は評判を獲得できるか (1) —シナリオ実験に基づく検討— 日本社会心理学会第58回大会発表論文集, 314.
- Latané, B., & Darley, J. M. (1968). Group inhibition of bystander intervention in emergencies. *Journal of Personality and Social Psychology*, 10, 215-221.
- Leary, M. R., & Kowalski, R. M. (1990). Impression management: A literature review and two-component model. *Psychological bulletin*, 107, 34-47.
- Muthén, L. K. & Muthén, B. O. (2015). *Mplus user's guide* (7th ed.). Los Angeles, CA: Muthén & Muthén.
- Parks, C. D., & Stone, A. B. (2010). The desire to expel unselfish members from the group. *Journal of personality and social psychology*, 99, 303-310.
- Reeder, G. D., Vonk, R., Ronk, M. J., Ham, J., & Lawrence, M. (2004). Dispositional attribution: Multiple inferences about motive-related traits. *Journal of Personality and Social Psychology*, 86, 530-544.
- 高木 修 (1982). 順社会的行動のクラスターと行動特性 年報社会心理学, 23, 137-156.
- 高木 修 (1987). 非援助動機の構造とそれに基づく非援助行動の特徴づけ 関西大学社会学部紀要, 19, 27-49.
- VandenBos, G. R. (Ed.) (2007). *APA dictionary of psychology*. Washington, DC: American Psychological Association.
- Van Vugt, M., & Iredale, W. (2013). Men behaving nicely: Public goods as peacock tails. *British Journal of Psychology*, 104, 3-13.
- 山本佳祐・田中宏明 (2018). 援助行動に対する第三者による批判の規定因: 自己呈示文脈に注目して 心理学研究, 34, 26-37.
- Zahavi, A., & Zahavi, A. (1997). *The handicap principle: A missing piece of Darwin's puzzle*. Oxford: Oxford University Press. (大貫昌子 (訳) (2001). 生物進化とハンディキャップ原理: 性選択と利他行動の謎を解く 白揚社)

Appendix 1 シナリオ内容

関係が予期される観察者がいる条件×高リスク条件

大学に入学して1ヶ月が経ったある日の放課後、男子学生Aは帰宅しようと大学の最寄り駅に向かった。踏切に差しかけたとき、男子学生Aが最近入会したばかりのサークルのメンバーが、線路の反対側に数名いるのが見えた。警報音が鳴ったので、男子学生Aは立ち止まって待つことにした。すると、後ろから見知らぬ男子中学生Bが走ってきて、踏切内に駆け込み、線路の真ん中で転倒したのが見えた。中学生Bは足をひねって歩きにくそうにしていた。反対側にいた数名のサークルメンバーもその様子を見ていた。男子学生Aは踏切内に入り、中学生Bに肩を貸して一緒に踏切を渡った。

【その他の観察者の条件操作】

- ・ 観察者がいない条件：辺りには人がいない様子だった
- ・ 関係が予期されない観察者がいる条件：見知らぬ大学生が線路の反対側に数名いるのが見えた

【その他のリスクの条件操作】

- ・ 低リスク条件：男子中学生が駐輪場で自転車を倒してしまった際に、近くにいた男子学生Aが自転車を起こすことを手伝う援助場面

条件数は、3（観察者の存在）×2（リスク）の6通りであった。

The mechanism whereby a third party infers self-presentational motive of a helper: The effect of presence of an observer and risk associated with helping behaviors

YAMAMOTO Keisuke & IKEGAMI Tomoko

The present study explored how a third party attributed self-presentational motives to a helper, in terms of self-presentational theory and costly signaling theory. Two hundred and five undergraduates read scenarios describing helping behavior and reported their impressions of the helper. Participants attributed self-presentational motives to the helper more frequently when there were some observers than when no observers were at the scene. From this result, it was suggested that a third party infers a helper's motives based on self-presentational theory. However, contrary to our prediction, the degree of inferring self-presentational motives did not differ based on whether the observers have social connections with the helper. Besides, inferring self-presentational motives did not influence evaluation of the helper. On the other hand, participants were less likely to attribute self-presentational motives to the helper, but less likely to have positive impression of him when helping behaviors were associated with high versus low levels of risk. This result did not support our notion that a third party infers the helper's motives based on costly signaling theory. Helping behaviors with a high level of risk may be regarded as inappropriate in terms of ethical perspectives. Implications and limitations of the current findings were discussed.